思い出の北海道
函館・知床・根室など

巖谷　國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。３月と７月に予定されていた北海道旅行はコロナ禍で中止となった。

この連載も今回で終る。これまでに書いていなかった函館とその周辺や、1970年代に訪れて以来ごぶさたしている知床や根室や、まだ行きついていない奥尻島などへも取材に行く予定を立てていたのだが、新型コロナウィルスの感染拡大ゆえに諦めざるをえなくなった。残念ではあるけれど、それならば、半世紀近く前にはじめて北海道を旅したころの各地の思い出を記して、北の大地への最後のオマージュとしよう。

函館についてはこの連載を開始するすこし前に取材旅行をして、『旅人類』誌の第２号に「函館、ノスタルジアとユーモア」という紀行文を書いていたため、本誌ではとりあげないできたという事情がある。それにしても、ここは私の最初に訪れた北海道の町であり、その後も幾度となく滞在した懐かしい土地もあるので、上記の記事にはふくまれていない思い出を書きとめておくことにする。

函館で見た２つの光

初回は1972年の初夏だったと思う。上野発の夜行列車で朝早く青森に着き、朝食をとってから青函連絡船に乗って、約４時間後、甲板から望んだ函館山と市街の光景は格別だった。以来、飛行機がまだ一般的ではなかったせいもあるが、函館へ行くなら連絡船と決めていた。のちに新幹線や飛行機も体験したけれど、あの船で海峡をわたるあいだの時間と、海から地形や風景を見る時間は独特のもので、いまでもできればこれに乗りたいと思うほどだ。

港に着いてすぐ近くの市場でなにか食べた。初体験だからイカ素麺（そうめん）を選んだかもしれない。その後に幾度も訪れたので記憶が混っているが、ここは全国でも有数の駅前市場で、イカ（いまではあのイカール星人も！）やカニやタラコやホヤの彩る売場と、働く人々のラフな服装やフランクな様子は、ある意味で北海道そのものだ。食事も単純明快で、しかも旨い。

駅前から市電に乗って末広町で降り、すこし歩いて宿に着いた。ホテルニューハコダテ。噂にきいて予約していたところで、戦前の安田銀行（戦後は富士銀行）函館支店をそのまま使った建物だから、一目ではホテルと判らない。1932年竣工、鉄筋コンクリート二階建でさほど大きくないが、西洋古典主義様式を下敷にした堅固な造りで、角が丸く、正面の４本の円柱のあいだに３つの細長い格子窓がおさまり、垂直にのびた上がアーチ型になっている。昭和モダニズム時代の銀行なのにこの建物はモダンではなく、重厚ではあっても威圧的に見えず、むしろかわいい感じもある。

青函連絡船「摩周丸」。函館港にのこされ、いまは記念館になっている。　撮影：筆者

函館ハリストス正教会の北側。　撮影：筆者

内部も独特だった。銀行建築だから壁が厚く、よけいな飾りがなく、部屋は狭く薄暗く、シックで静かで落ちついている。気に入ったのでそれ以来、函館ではここに泊まることにしていた。

ホテル創業は1969年だが2010年に廃業したという。その後も通りがかりに元のままだと確認していたが、17年には別のホテル（HakoBA函館）の一部になったらしい。変化がなければいいのだが。

それはともかく、私はまずホテル前の八幡坂をのぼった。ほかの銀行など戦前の建物がいろいろあって、往時を偲ばせる坂道だが、目的地は函館ハリストス正教会である。当時はまだロシアや東欧にもギリシアにも行ったことがなく、正教会といえば神田ニコライ堂（東京復活大聖堂）くらいしか知らないでいたので、まずこれを見ておきたかった。

函館ハリストス正教会（正式には主の復活聖堂――なおハリストスはキリストのギリシア名）の起源は1859年にさかのぼり、日本での正教伝道の発祥とされるが、1907年の函館大火で全焼。現在の聖堂は９年後に再建されたものだ。さほど大きくはないが正面は細長い三階建で、真新しく見える漆喰壁の白と、重層する屋根のペパーミントグリーンとの組みあわせが清楚で美しく、のちに旅したロシア・東欧の聖堂と並んでいても違和感がないだろう。よくいわれるようにお菓子を思わせ、かわいい感じもある。

内部はかなり広いが薄暗く、正面奥にひろがるイコノスタシス（聖障＝聖画に覆われた垂直面）の黄金がうっすら輝いていて、魅きつけられたのを憶えている。光源は上のシャンデリアと、あちこちに林立する蠟燭だが、輝きは内側から発しているように見えた。美しい光を揺らす蠟燭の列からだろうか、独特の香気が漂う。正教の聖堂に特有のこの感覚は私の場合、函館で最初に味わったものである。

外へ出て、港を見はるかす元町から大三坂を降りるあいだ、あたりにキリスト教会が多いことに気づく。英国聖公会の函館聖ヨハネ教会（1878年／1979年改築）、フランス系のカトリック元町教会（1923年築）、アメリカ系の日本基督教団函館教会（1877年／1931年改築）等、それぞれ趣のある建物だ。こんな狭い地域にこれだけ教会のある町はめずらしく、キリスト教都市としての函館も考えてみたくなった。

夜はロープウェイで函館山にのぼり、夜景を見る。美しい。よく長崎、神戸とならべて三大夜景とかいうけれど、比較にならないと思えた。両側に黒い湾が入りこみ、巨大な杵のような形にひろがる光の海は息をのむばかりだ。ハリストス正教会の堂内の光とこの光と、私にとって初の函館を代表するのはこの２つの光だったかもしれない。

函館山からの夜景はその後に何度も見たが、そのたびにすこしずつ寂しさを増していることに気づいた。中心部の人口が減り、空き家や空き地がふえているせいだ。そのかわりこの町には寂しさの魅力も加わった。ノスタルジアと、そこにまじる微かなユーモアと。前記『旅人類』誌に書いた紀行はそれをテーマにしたものだった。

夢幻のなかの知床

函館から渡島・檜山の各地へと足をのばしたこともある。松前については15世紀のコシャマインの戦いや和人側の19世紀までの北海道史などを、江差については北前船やニシンや開陽丸などを語りたいところなのだが、紙幅に余裕がない。大沼についてならばすでに前記の紀行に記してある。

温泉のことも書けたらよいのだが。市内の谷地頭温泉へ駅から直行したことも、家族と湯の川の旅館の窓から夜の漁火を眺めたことも、恵山温泉から太平洋の荒波を見おろしたことも、道内最古とされる知内温泉の露天風呂で森の紅葉を愛でたことも、記憶にくっきりのこっている。銀婚湯の寂々とした風情も、長万部の奥の秘湯・二股ラジウム温泉の奇観もよかった。二

知床の観光船から見たカムイワッカの滝。岩山の上の温泉をふくむカムイワッカ湯の滝が、そのまま流れて海に直接おちている。
写真：知床斜里町観光協会提供

股の湯治宿は建てかえられたと聞くが、あの怪異な石灰華の大ドームはいまどうなっているだろう。

そういえば当時、函館からの列車は長万部で分岐するので、札幌へ行くには室蘭本線と千歳線、小樽へ行くにはそのまま函館本線、と決めていた。知床へ向ったのは最初の函館滞在のあと、長万部経由で札幌に出て、数日をすごしてからだった。

あのころは北海道周遊券という安い便利なものがあり、特急以外の列車には使えたので、札幌から網走までは夜行急行「大雪」だったはずだ。はずだ、というのはそのとき体調を崩し、のちに入院する羽目となるという厄年だったせいで、途中の記憶が抜けているからだ。あいにくカメラなしで出かけたため、知床までの行程は曖昧で、霧のなかを旅していた感もある。

朝早く網走に着いて一泊し、小清水をへて斜里からバスで、知床のウトロまで行った。めずらしくユースホステルに泊ったのだが、どこのユースホステルだったか思いだせない。調べてもらうと、いまあるユースホステルは岩尾別だけだが、当時はウトロにも斜里にもあったというので、そのうちのどれかだろう。たしか囲炉裏のあるような鄙びた部屋で、疲れて冷えた体を温めながら、風格のある年長者の話を聴いた。

それが著名な獣医師にして写真家・随筆家の竹田津実さん（1937－）だったことはまちがいない。というのは、旅行写真家だった伯父の故・吉村力郎が氏の友人だったので、出発前に紹介状を用意してくれていたからだ。竹田津氏は1963年から斜里郡小清水町農業共済組合家畜診療所の獣医師になり、91年まで勤めているが、74年には初の著書『キタキツネ北辺の原野を駆ける』を上梓しているし、さらに78年にはあの長篇ドキュメンタリー映画『キタキツネ物語』を企画・動物監督として完成させ、高い評価を得ている。

72年にはすでにキタキツネの保護と撮影を進めておられたので、その話を伺ったはずだ。さらに知床の自然のことも。周知のとおり知床は2005年にユネスコの世界自然遺産に登録されているが、それより30年以上も前に、この特異な半島の貴重な自然相について、短時間ながら手ほどきをうけたのだと思う。

知床自然センターの公式サイトでは「流氷がはぐくむ、海から山への命の輪」と要約されているように、流氷の運んでくるプランクトンによって多種多様の魚が育ち、それを食べて多種多様の海獣や鳥が育ち、川の急流を遡上するサケ・マスを食べて獣が育つ。険しい山ばかりの陸地では標高差に応じて多種多様の植物が育ち、それを食べて多種多様の動物が育つ。こうした「栄養の循環」を生む原初的な自然のありかたからして、知床の大地はいわば「北の楽園」のイメージを喚びおこす。

竹田津さんの撮影していたキタキツネも、その循環のなかにあることを理解できた。そしていまも思うのは、そんな自然界に人間の文明は必要ない、「開発」などしてはならない、ということである。知床が世界自然遺産に登録されたのは、もちろん観光や商売のためでもなく、文明と人間のためですらない。自然のためである。

私はいわゆる名勝を訪ねるのはやめ、体調を考えて観光船に乗るだけにした。半島の西北岸に沿って往復するクルーズで、ウトロ港から出航する。霧が出ていて視界がわるく、半島の景色はよく見えなかったが、それでもカムイワッカの滝は憶えている。険しい岩壁のすきまから海へ直接おちてくる幾筋かの白い滝は美しく、いまも夢幻のように脳裏にうかぶことがある。

知床半島は高山が海からそのまま生えて連結しているような地形である。ウトロ側だけで約40本の川があるというが、どれもが急流で、しかも急流のまま海に

注ぐ。海におちる滝になるものも多い。カムイワッカの滝はその代表だが、それに出会えただけでも幸を感じていた。

根室、岬の寒風と湖の白鳥

根室半島へはその３年後、1975年の厳冬に行った。ちょうど北海道の冬が恋しくなっていたところへ、若い友人たちが同行を申し出てきて、そのなかに運転の上手な写真家の卵がいたため、私にはめずらしいレンタカー旅行となった。

１月末に函館から小樽へ出て、当時まだあった釧路行の夜行普通列車「からまつ」に乗る。寝台などない自由席で、空いていたので４人掛のボックスを２人ずつで占めたが、坐っていたわけではない。２人用の横長座席をボックスの木枠からはずして床に置く。その上で横になる。もちろん寝るためである。

夜行の鈍行だからゆっくり走る。ときどき目がさめる。４時ごろだったか、停車時間の長い帯広駅に着いたので、デッキから外へ出てみると、寒い。いや、ただ寒いなどという程度ではなく、ふいに顔がこわばって眉毛や鼻毛が凍りついた。駅員がいたので聞くと、「しばれるねえ、零下30度かな」と笑顔でいうので驚く。車内に戻るとこわばりは融けたが、温度差50度以上というのは冬のフィンランドで、サウナから湖の氷の裂け目にとびこむよりも激しい体感だった。

釧路で熱い蕎麦を立ち食いしてから、乗りかえて根室まで行き、駅レンタカーを借りたのだと思う。うっすら霧が出ていて、白い雪をかぶる市街地は美しかった。一気に走って東端の納沙布岬に着く。車から出ると猛烈な寒風が襲いかかった。気温は夜中の帯広ほどではないが、風と湿気があるからなお寒い。このとき以来、厳冬のモスクワを歩いたときも、これほどの寒さに震えることはなかったと思う。

霧にかすむ海は混沌としていたが、かなたに島影が感じとれる。歯舞諸島西端の水晶島（タンフィーリエフ島）だろう。いわゆる北方領土だった島だが、「領土」というのは近代国家成立以後の概念なので、私は用いない。歯舞はロシア語でもハボマイで、アイヌ語の「流氷が退くと小島のあるところ」に由来する。もともとオホーツク海の全域に住むアイヌにとっては領土も国境もなく、地理上の地点があるにすぎないのだ。本来ならアイヌもロシア人も日本人も、住みたければともに住んでよい土地である。統治したいならむしろ共同統治という、新しい平和的な形を選ぶこともできたろう。

ところが昨年の外交の結果では、ロシア領と認めたらしい。現地の人たちにはどのように受けとられているのか、いま旅行が可能なら行ってみたいとも思う。

それはともかく、もう紙幅がない。冬の市街地の有様やラーメンの味についても、有史以前からの興味ぶかい歴史についても触れたいところだが、機会をあらためよう。最後は冬の根室の自然を思いださせる昔の写真を掲げるだけにしたい。

根室の市域は広く、半島の全体とその付け根にまで及んでいる。付け根の北岸にある風蓮湖は広大な汽水湖で、国内最大の白鳥の飛来地なのだ。このときもカメラをもたない旅行だったが、のちに職業写真家となった故・吉田隆一君が同行していたので、何枚かの写真がのこされた。ただし人物の入った記念写真ばかりで、風蓮湖のものにはあいにく私が写っている。それでも白一色の湖岸に散らばる白鳥たちの姿は、それぞれ雪の一部であるかのように見え、遠い記憶に刻まれているものだ。この雄大な自然の光景のなかに、着ぶくれた人間の姿など不要である。

（すばらしい北海道　完）

1975年1月末、根室の風蓮湖の白鳥たちとたたずむ筆者。　撮影：吉田隆一